Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-19

人文・社会科学系の課題研究指導 ： 高校生による質的研究の教育的意義と課題

勝部, 尚樹

(Citation)
研究紀要 ： 神戸大学附属中等 論集,9:19-26

(Issue Date)
2025-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100494030

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100494030

実践報告

人文・社会科学系の課題研究指導
― 高校生による質的研究の教育的意義と課題 ―

Guiding inquiry-based learning in the humanities and social sciences
-Educational significance and challenges of qualitative research by high school students-

勝部　尚樹
KATSUBE Naoki

本稿は高校生による人文・社会科学系の課題研究への指導における、インタビューや現地調査等にもとづく質的研究の教育的意義と課題を論じる。研究手法が一定程度共有されている自然科学系の課題研究や量的研究とは異なり、人文・社会科学系の課題研究はその方法論が十分に確立されていない。しかし人文・社会科学系における質的研究は、生徒が研究過程で自身の問題意識を再構築する「捉え直し」が起こりやすい点、また社会問題を主体的に捉えて自己の在り方生き方を考える契機となる点で、教育的な意義が大きい。定型化されていない質的研究の分析方法には課題があるが、「厚い記述」や質的・量的手法を組み合わせた混合研究によって研究の質を高める可能性がある。

This paper discusses the educational significance and challenges of qualitative research based on interviews and field research in guiding high school students' inquiry-based learning in the humanities and social sciences. Unlike inquiry-based learning in the natural sciences and quantitative research where research methods are shared to a certain extent, the methodology for inquiry-based learning in the humanities and social sciences has not been fully established. However, qualitative research in the humanities and social sciences holds educational significance in that students are likely to reconstruct their own awareness of issues in the research process, and it is also an opportunity for them to take a proactive view of social issues and think about their own identity and way of life. While there are challenges in analyzing qualitative research due to the lack of standardized methods, there is potential to improve the quality of research through "thick description" and mixed research combining qualitative and quantitative methods.

キーワード：課題研究、人文・社会科学、質的研究
Key words: Inquiry-Based learning、Humanities and Social Sciences、Qualitative research

I　はじめに

2022 年度より全面実施となった高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）では「探究」が重視され、とりわけ「総合的な探究の時間」（平成 31 年度入学生より先行実施）は学習指導要領の要である。従来の探究学習は一部の先進的な学校や文部科学省指定のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）校などに限られていたが、今回の学習指導要領改訂に伴い全国の高等学校で探究学習が実施されることとなった。現在は自然科学（数学、物理学、化学、生物学、地学等）に限らず人文科学（文学、歴史学、地理学、心理学等）、社会科学（政治学、経済学、経営学、教育学、社会学等）と幅広い分野の課題研究が進められている。

一方で、実験等の研究手法が一定程度共有されており、SSH 校での実践事例も多い自然科学系の研究に比べて、人文・社会科学系の研究は少なくとも中等教育の現場レベルではその方法論が確立しているとは言い難い。

自然科学系は以前より高校生対象の研究発表会や学会発表の機会が数多く存在するが、人文・社会科学系はその機会も少なく、大学の研究者等の知見に直接触れられる場が限られている[1]。

課題研究の研究手法としては大きく分けて質的研究と量的研究がある。大規模な調査対象のデータ分析をもとに一般化を目指し客観性を重視する量的研究に対して、質的研究は「対象となる事象や個々人の経験を詳細に記述し、先行研究との比較検討をしながらその事象を主体的に解釈することで、読み手の文脈に汎用可能な示唆を持たせることに重きを置く」（今福 2021）ものである[2]。

人文・社会科学系の研究のなかでも研究方法が明瞭である統計的手法を用いた量的研究は、データサイエンス教育の隆盛もあって実践例が多い。一方でインタビュー調査や現地調査（フィールドワーク）等にもとづく質的研究については分析方法まで踏み込んだ実践例は多くない[3]。

さらに量的研究と比較して、質的研究に対しては研究者の中でもエビデンスの客観性という面で信ぴょう性が疑問視されることがある（井頭 2023）。

しかし、インタビューや現地調査といった手法を用いる質的研究は高校生が社会問題を研究するにあたって有効な手段であることにとどまらない。質的研究は生徒自身にとって、自己の在り方生き方そのものに関わる形で探究の力を身につける点で教育的意義を見いだせる。

本稿では人文・社会科学系における課題研究において、特に質的研究がどのような教育的意義を持つのか、実践報告を通じて論じる。神戸大学附属中等教育学校での課題研究指導の具体的な事例をもとに、実際にどのような指導をしているか、どのような課題があるのかについて述べる[4]。

もちろん本稿の内容は人文・社会科学系だけでなく自然科学系の研究にも該当するものがあるが、今回はあえて人文・社会科学系に限定して論じることで、その特徴や課題を明らかにしたい。また昨今は「文理融合」「STEAM」などが注目されているが、自然科学とは異なる人文科学・社会科学の領域特有のアプローチを検討することは、異分野融合への礎にもなるだろう。

なお本稿では人文・社会科学系のなかでも、文学研究や歴史学研究などのテキスト分析研究には触れず、高校生の中でも取り組む生徒が多い社会科学系、あるいは心理学系の課題研究を対象とする。

II　人文・社会科学系の課題研究の概要

1　本校における人文・社会科学系の課題研究

本校の課題研究（総合的な探究［学習］の時間、「Kobe ポート・インテリジェンス・プロジェクト」）では 1 人 1 テーマで個人研究を行っている。毎年 5 月に研究テーマ希望を提出し、それをもとに本校研究部が講座編成をする。2020 年度より、3 年生（中学 3 年生）から 6 年生（高校 3 年生）までの 4 学年が同じ講座で学ぶ協同ゼミ形式で実施しており、大まかな分野ごとに 33 講座（1 講座あたり教員 1 名、生徒 15 名程度）に分かれて学んでいる。年度末に論文を執筆し、最終的には 6 年生で 18,000 字相当の卒業論文を提出する。

3〜6 年生の研究テーマについて、文部科学省の学校基本調査で用いられている学科系統分類表をもとに分野別に集計した結果を図 1 に示した（時期：2024 年 5 月、対象：3〜6 年生［11〜14 回生、470 人］、方法：フォームで提出。集計：研究テーマをもとにして筆者が分類した）。図 1 によると、半数近くの生徒が人文・社会科学系の研究テーマを設定している。また人文科学の内訳は 5 割以上が心理学であり、本稿が対象とする領域で研究をしている生徒は多い。

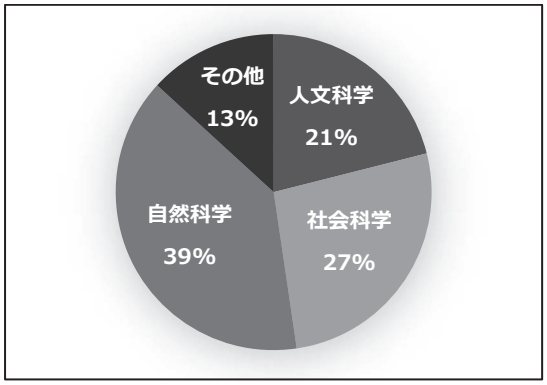

図 1　研究テーマの分野
※「人文科学」のうち 53%は心理学
※「その他」は芸術、スポーツ、領域横断的テーマ等

一方で人文・社会科学系の課題研究指導に課題を持っている授業者は一定数いる。2023 年 12 月 25 日に本校が開催した課題研究指導オンライン交流会では「高校探究入門期・中学生」「人文・社会科学系の研究」「自然科学系の研究」「統計を用いた研究」の 4 つの分科会を設けたが、全国からの申込者 40 数名のうち半数以上が「人文・社会科学系」を選択した。参加者からは「文系の研究の方法がわからない」「インタビューの分析をどう指導すればいいかわからない」などの質問があった。

２　人文・社会科学系の課題研究の流れ

人文・社会科学系の課題研究の流れとして本校での例を以下に示す。

①仮の研究テーマ・研究計画を立てる
②文献調査（複数の書籍、論文を批判的に検討）
③仮説を立てる
④調査をする
　インタビュー、アンケート、現地調査、実験等
⑤分析（質的・量的）をする
⑥校内外で発表する
⑦論文にまとめる

もちろん順序通りに行くわけではなく、戻ったり、見直したり、時に停滞したりしながら論文執筆に向かっていく。

筆者は 2022 年度から 24 年度の 3 年間にわたって社会学講座を担当した。生徒それぞれの研究テーマは多様だが、政治、ジェンダー、地域、その他社会問題など広く人文・社会科学に関する研究をしている生徒が在籍していた。

講座内では Google スプレッドシートで「研究進捗共有シート」を作成し、定期的に共有していた（稿末の【資料】参照）。講座メンバーの状況に触発されながら講座全体で研究を進める意識を持つことを意図している。

3 年間の社会学講座で特に校外でインタビューを行った生徒の例（一部）を表 1 にまとめた。

表 1 社会学講座のインタビュー先（例、一部）

	研究テーマ	調査対象
a	子ども食堂と食生活課題	市役所、子ども食堂
b	消滅危惧言語の保全	言語の話者
c	性自認の形成	当事者（NPO 法人）
d	高校生の精神障害	当事者（当事者団体）
e	女性の政治参画	市役所
f	動物実験の是非	管理機関、市民団体

筆者の講座では質的研究を促している。後述するが、とりわけ研究対象を主体的に解釈する点に高校生の課題研究で質的研究を行う意義があると考えている。

III　具体的な指導

１　テーマ設定：時には「怒り」のエネルギー

研究テーマの設定にあたっては、本校研究部『課題研究・卒業研究ハンドブック』に従って「やりたい（興味がある）」「できる（研究可能で、１年間かけて取り組める）」「（社会的・学術的に）意義がある」の３つの観点から考えさせる。

さらに特に社会科学系の場合は「これはおかしい」という怒りのエネルギー、理想と現実のギャップから設定することで[5]（図 2）、社会問題を自分の問題として捉えることができる。また筆者の実感としては「興味」からスタートしたときよりも研究へのモチベーションが持続するケースが多い。

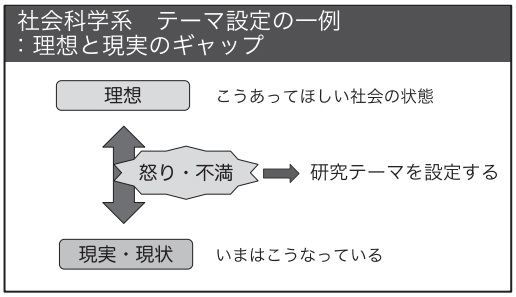

図 2　テーマ設定方法の例（授業スライドより）

また、後述するように研究テーマはインタビューや現地調査を通して変わることが多く、この段階ではざっくりとした仮の研究テーマとして設定することを促す。研究テーマは研究の過程で設定

し直すものである。

２　文献調査：まずは書籍から

文献調査では書籍を読むように指導している。現在は論文がインターネット上で容易にダウンロードできるので、生徒はまず論文検索サイト等から論文を読もうとする。もちろん論文では最先端の研究成果が読めるが、一定の知識を持っていることが要求されるため生徒にとっては理解が難しいことが多い。高校生が当該テーマの内容を知るためには教科書的なテキストや新書等の書籍でまとまった内容を理解することが近道である。こういった本の調べ方を教えるとともに、学校図書館とも連携しながら本を紹介する必要がある。

授業では文献調査の結果をスライドにまとめて発表する機会を設けて書籍を読んで理解を確認するように促している。さらに参考文献などを参照しながら複数の文献にあたることも促して、先行研究の批判的検討まで行うことを目指す。先述の「研究進捗共有シート」（【資料】）で読んだ文献（書籍・論文）の冊数も確認していた。

仮の研究テーマを設定した後にこのような文献調査を経て、研究テーマを再設定してから調査計画を立てる。

３　調査手法：一次調査を促す

研究の過程が高度化し、自律的に行われるような質の高い研究のためにはオリジナルな一次情報をもとに論じる必要がある。

図 3-1、3-2 は 2023 年度末に本校生の当該年度の研究活動における調査手法を調べたものである（対象 : 3〜5 年生［11〜13 回生］344 人、時期 : 2024 年 3 月 14 日〜31 日、方法 : ポスター提出時にフォームにて回答。複数回答可。集計 : ほぼ全員が行っている文献調査は除き、「インタビュー」「アンケート」「実験」「データ分析」などを「一次調査」とした。ただし文学、歴史学等の人文学分野は文献調査のみの研究が多いため「文献調査」として割り振った）。

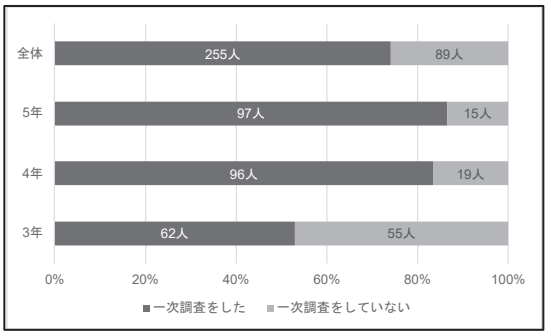

図 3-1　生徒の調査手法：一次調査をした生徒

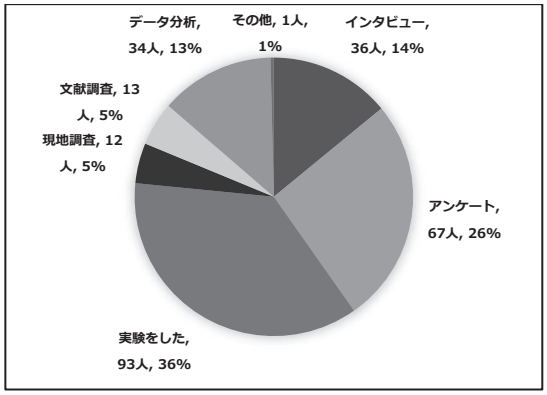

図 3-2　生徒の調査手法：一次調査の内訳（複数回答可）

図 3-1 より、多くの生徒がインタビュー調査、アンケート調査、実験などの一次調査を行っている。一方で「一次調査をしていない」は全体の約 26%（89 人／345 人）である。「一次調査をしていない」は、実験を行う場合がほとんどである自然科学系ではなく、人文・社会科学系の研究が多い。なお 3 年生が特に目立つが、本格的な個人研究を始めたばかりの学年であるため例年の傾向である。これらの生徒の論文はインターネット上の情報をもとにまとめたものがほとんどで、いわゆる「調べ学習[6]」のレベルに留まる。指導教員からの年度末の評価も高くない傾向にある。

よって質の高い研究のためには一次調査を促すことができるかが重要である。

さらに一次調査を行った生徒のうち、調査方法の内訳を見ると（図 3-2）、おもに自然科学系の研究で行う実験を除くと、人文・社会科学系はアンケート調査、ついでインタビュー調査が多い。これは本校が SSH 校の学校設定科目「データサイエンス」を設けている影響が大きく、基本的な統計手法を身につけて課題研究に活かしている者が一定いる。

４　質的調査を促す：２つの理由

筆者の担当していた社会学講座では、研究テーマの傾向を加味して一次調査として「インタビュー」「現地調査」「アンケート」のいずれかを必ず実施するように指導している。2022〜24 年度の 3 年間の講座生徒はほぼ全員が一次調査を行った。

特に一次調査の中でもインタビュー調査や現地調査を促しており、各年度の講座生徒のうち半分以上がインタビュー調査を行っている（例として前掲の表 1 を参照）。

ここではインタビュー調査等の質的調査を促す理由を 2 点述べる。

１）「捉え直し」が起きやすい

質的調査の利点として、問題の捉え直しが比較的起きやすいことが挙げられる。

インタビューに行く前には事前調査をして、ある程度のインタビュー項目も決めてから行く（半構造化インタビューを実施することが多い）。ところが、校外でのインタビューや現地調査に行った生徒はほとんどが事前に持っていた枠組みを外して戻って来る。インタビューは多くの場合、自分で依頼して 1 人で校外に出かけるので生徒にとってハードルが高いが、得るものは非常に大きい。

たとえば表 1 の生徒 a は子どもの食問題に関心を持っていた。経済学や社会学の先行研究を複数読み「子どもの欠食を解決するにはどうしたらよいのか」というリサーチ・クエスチョン（RQ）を設定した。次に既存のデータ（e-Stat の統計データ）の分析を行い、世帯年収と子どもの食生活課題の相関分析を行った。さらに兵庫県内の自治体の担当者、および子ども食堂の運営者へのインタビュー調査を行った。するとインタビュー前は子どもの食生活課題を世帯年収の観点から分析していたが、インタビューによって、必ずしも経済的貧困だけが要因ではないことを知った。事前の調査が不足していたとも認識し、改めて調査を進めた。

ここで生徒 a には「捉え直し」が起きている。上野千鶴子は量的調査では仮説を超える発見に至る蓋然性が低くなると述べている（上野 2018）。また岸政彦は当事者から「それまでの思い込みを覆すような貴重な語りを聞く」ことで、基本的なところから見直して考え直す経験が、特に「質的な関わり方」をする場合に多いと述べている（岸 2016）。インタビューに行った生徒は当初に抱いていた思い込みや仮説などの枠組みを見直していた。

さらに、インタビューや現地調査によって研究テーマを再設定する必要が生じることが多い傾向にある。課題研究の指導書などでは冒頭に研究テーマの設定が置かれる。しかし研究の過程でテーマは変わるものであり、特に質的調査の場合はインタビューや現地調査によって問題意識を再構築し、研究テーマ全体を見直して修正することが多い[7]。

たとえば表 1 の生徒 b は消滅危機言語について「保全する方法とは何か」という RQ を立てて調査しており、その話者に直接話を聞きに行った。その場では当事者の方から「国家が歴史を無視して、今頃になって保全する」ことの問題を提示されたそうだ。その生徒は「ハッとした」と語っており、その後は RQ を「保全することはよいことなのか」に変えることになった。

２）自己の在り方生き方を考える契機になる

「理系の研究はテーマを決めるのは自分だけど、実験データがあって、そこに自分の考えが介入することはあまりない。文系の研究は、調査するなかで、自分がどう思っているかがすごく問われる。」

これは社会学講座のある生徒が話していたことである。この生徒は 3・4 年生では自然科学系の研究を、5・6 年生では社会科学系の研究を行っていた。

自然科学系の場合は実験データなど、事実としてのデータの解析が一般的といえるだろう。一方人文・社会科学系の研究は人や社会など、容易に数値化できない対象であることがほとんどである。そのため、調査者の立ち位置やバックグラウンドに左右されやすい研究であるともいえる。だからこそ、調査者である生徒の在り方が問われるのである。

高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）では「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」とな

ったが、両者の違いの説明として『高等学校学習指導要領解説　総合的な探究の時間編』では図 4 が用いられている。「探究」では「自己の在り方生き方に照らし，自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら」「自ら問いを見いだし探究することのできる力」[8] の育成が求められている。

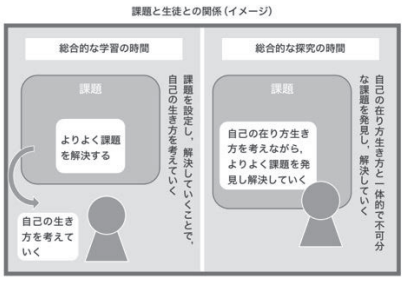

図 4　課題と生徒との関係
出典：『高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編』

これは高等学校で探究をする意義である。現在は高大接続の観点から SSH 校をはじめとして探究の高度化・専門化が進んでいる。しかし高校生の大学進学率は 50％台であり、そもそも高等学校の探究は大学で研究をすることだけが目的ではない [9]。特に人文・社会科学系の課題研究では、自己の在り方生き方を研究対象と照らし合わせながら考えることができる。

5　質的調査の分析：分析の妥当性を求める

一方で、質的調査の分析には課題がある。しばしば指摘されるように、質的調査で得られたデータを分析する方法は、あまり定型化されておらず（小熊、2022）、「「個人の語りからどれくらい社会全体のことが〈客観的に〉言えるか」という問題」（岸 2016）が存在している。

実際に、筆者の担当する社会学講座が異分野（異講座）合同での発表会を行ったときも、社会学講座の生徒の発表に対して物理学講座の生徒から「結論が主観じゃないのか」「1 人のインタビューで一般化していいのか」などの素朴なコメントがなされていた [10]。

よってインタビュー結果を入念に分析することで研究の妥当性を高めることが必要である。まずはインタビュー内容を先行研究やデータと照らし合わせて同一点や相違点を整理するなどして分析する。さらにインタビュー調査だけでなく、アンケート調査や既存のデータ分析と組み合わせた研究、混合研究の指導も必要だろう。2024 年度は生徒向けに「質的調査講義 [11]」を実施した。

一部ではあるが、丁寧な質的分析を試みる生徒もいる。上記の講義に参加した表 1 の生徒 c は当事者複数名に対する複数回の半構造化インタビューを文字起こしし、テクストを作成した上で特徴的な語りごとにラベルをつけて分けるコーディング処理を行っていた。また、別の生徒は当事者インタビューの内容が先行研究と異なっていることを指摘し、同一点と相違点を分析して論文にまとめた。

IV　結論・今後の課題

本稿では人文・社会科学系の課題研究の特に質的研究に焦点を当てて論じた。

自分自身が社会に対して抱いている「怒り」のエネルギーからテーマを設定し、文献調査を経て校外のフィールドに出かける。実際の現場で当事者に出会い、リアルな声を聞く。インタビューや現地調査等の質的研究の教育的意義として、課題研究を通した自己のフレームワークの変容（捉え直し）、自己の在り方生き方・キャリアを考える契機になることの 2 点を述べた。

本校生でもすでに、アンケート調査とインタビュー調査を実施し、厚みのある記述で分析した質量混合研究をしている者もいる [12]。しかし社会科学の手法に則って質的研究を実施している生徒はわずか一部にとどまっている。今後はこのような質的調査の分析の指導をどのように進めていくかが課題であろう。

複雑化した社会の現象は、客観的な数値やデータの分析だけでなく、個別の経験を分析してこそ深く理解できる（村上、2023）。質的研究・量的研究を組み合わせて研究することは、領域横断的な研究にもつながるだろう。

謝　辞

本稿は2023年11月25日に神戸大学で開催された科学基礎論学会2023年度秋の研究例会におけるワークショップ「科学哲学と中等教育における科学教育」で「人文・社会科学系の探究学習の現状」と題して発表したものをもとにしている。ワークショップのオーガナイザである神戸大学大学院システム情報学研究科特命助教の森田紘平先生、登壇者の草場哲先生、若杉誠先生、本ワークショップに参加し議論してくださった皆さまに感謝いたします。また千葉大学教育学研究科准教授の阪上弘彬先生、神戸大学大学教育推進機構みらい開拓人材育成センターユースドクター育成部門特命助教の三輪泰大先生に助言をいただきました。ありがとうございました。

注

[1] 本校研究部が独自に集約した「学会発表（高校生発表）一覧」によると、日本物理学会や日本鳥学会など高校生対象の発表会を設けている学会は50を超えるが、そのうち人文・社会科学系は日本地理学会、日本語学会、日本心理学会などごくわずかである。また全国レベルの大規模な発表会である「日本学生科学賞」「高校生・高専生化学技術チャレンジ（JSEC）」「SSH生徒研究発表会」も分野が自然科学に限られていることが多い。また量的研究ではデータ分析を用いた研究を対象とした発表会等が増えている傾向にある。

[2] 本稿では便宜的に質的・量的を分けて論じているが、その境界は曖昧である（井頭2023）。なお本稿では自然科学系の質的研究には触れない。

[3] 本校で副教材として使用している岡本尚也『課題研究メソッド2nd Edition』（啓林館、2021年）でも他の研究方法と比べて「定性的なデータのまとめ方・分析方法」は1〜2ページしか扱われていない。なお人文・社会科学系の課題研究の実践としては学校図書館を中心とした宅間紘一『はじめての論文作成術　論文の考え方・書き方』（新泉社、2021年）、小笠原喜康・片岡則夫『中高生からの論文入門』（講談社、2019年）などがある。

[4] 高等学校の課題研究には研究型（個人やグループで研究して論文等にまとめるもの）とプロジェクト型（地域課題の解決に向けた取り組み、ビジネスプラン、ものづくり等）などがあるが、本稿では前者を扱う。また教科での探究ではなく「総合的な探究の時間」で実施されるものに限定する。なお本実践の対象は中等3年生〜6年生だが、本校の実情も踏まえて便宜的に「高校生」としている。

[5] 社会問題に関するテーマ設定について、自分が現在／過去の生活を省みて「嫌だ・困っている・ほっとけない」といった怒りや不満からアプローチすることについては川中（2019）を参照。

[6] 「調べ学習」は課題研究を進めるうえで必須であり、否定されるべきものではない。しかし「調べ学習」の上に、さらに問いを設定したり、一次情報を集めたりすることが必要である。

[7] 現地調査によって問題発見に至るケースについては佐藤（2002）第3章を参照。

[8] 『高等学校学習指導要領解説　総合的な探究の時間編』p.9

[9] 「大学で勉強するため」だけではない高校での探究の意義については河野（2021）第1章を参照。

[10] どの生徒も、分野によって異なる方法論を学ぶ必要がある。よって学年・学校全体の発表会や異分野合同発表会などの異なる分野の研究手法にふれる機会は生徒にとって有益である。異分野合同発表会の授業実践としては勝部・竹村（2023）を参照。

[11] 2024年6月、神戸大学大学教育推進機構教授の石川慎一郎先生に「探究研究における質的・量的：4G＋1E Mixed Method確立に向けて」と題した講義をしていただいた。

[12] 本校生による混合研究の例として公開されているものとしては、松浦茅南（2024）「女子高校生の摂食障害リスク及び痩身願望を高める媒体としてのインスタグラム：量的調査と質的調査を用いて」神戸大学附属中等教育学校『令和6（2024）年度　課題研究優秀論文集』がある。彼女は本校社会科教諭の指導を受けながら、今福（2021）等を参照しつつグランデッド・セオリー・アプローチ（GTA）の手法での研究を試みた。

文　献

佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの技法　問いを育てる，仮説をきたえる』新曜社

岸政彦（2016）「質的調査とはなにか」岸政彦・石岡丈昇・丸山里美『質的社会調査の方法―他者の合理性の理解社会学』有斐閣、2016 年

上野千鶴子（2018）『情報生産者になる』筑摩書房

川中大輔（2019）「社会参加に距離をとる若者とどう向き合うか」『部落解放』779

今福輪太郎（2021）「質的研究を実施するうえで知っておきたい基本理念」『薬学教育』第 5 巻

河野哲也（2021）『問う方法・考える方法 ―「探究型の学習」のために』 筑摩書房

小熊英二（2022）『基礎からわかる 論文の書き方』講談社

井頭昌彦（2023）「なぜ質的研究アプローチを再検討すべきなのか」井頭昌彦（編著）『質的研究アプローチの再検討　人文・社会科学から EBPs まで』勁草書房

勝部尚樹・竹村実成（2023）「第 3 学年～第 5 学年 総合的な探究（学習）の時間　異学年協同ゼミ「異分野合同発表会」」（神戸大学附属中等教育学校『研究紀要 神戸大附属中等 論集』第 7 号

村上靖彦（2023）『客観性の落とし穴』筑摩書房

【資料】研究進捗共有シート（部分的にマスキング処理をしている）

研究進捗共有シート（ ○年7 月）

			文献調査		調査				論文	外部発表	
出席番号	名前	研究テーマ	読んだ書籍数（全部読んでなくてもよい）	読んだ論文数	インタビュー調査	アンケート調査	その他調査	夏休み、どんな調査をする	いま、だいたい何文字？	①実施済み ②発表予定 ③したいけどまだ ④したくない	今の悩み
	（例）	4学年協同ゼミの学習効果について	2	4	・２件実施／ ・相手を探し中	・実施予定／ ・倫理審査中	・現地観察調査	・調査対象の場所に参加者として行ってみる	3000字	③	どの発表会に出たらいいかわからない
		○○を存続させる方法とは	2	0	やりたいけどまだ何も決めてない	とってみてもいいかも	○○に行ってみたい(構想段階、厳しいかも)	文献調査	0字	③	インタビューのやり方がわからない
		好感が持てる話し方とは	2	1	予定なし	やりたいが具体的に決まっていない	自分で試す	文献調査	0字	③	研究のテーマが定まらない
		映画『○○』の「○○」における美学	14	4	やりたいが決まっていない	やる予定無し		文献調査、映画を見る	0字	③	
		若者の○○参加を増やすには	0	0	○○センターの人か○○社の人とか	実施する					何発表しよう
		○○の政治参画の問題点とは	2	3	どこかにいきたい	恐らくしない	読もうとしている論文を読む	文献調査	0字	③	方向性を決めたい
		○○制度導入による社会的価値観の変化	2	1	やりたい	未定	論文読む	文献調査 インタビュー先探す	0字	③	テーマ悩み中
		○○はいかに形成されるか	2	11	8月に行ってきました。9月10月に２回します	おそらくしない		インタビュー	0字	②	○○高校との発表しないといけない…　分析頑張らないと
		最適な○○とは何か	2	3	現在、○○大学の先生に依頼中	多分いつかしそう	Pythonを用いたシミュレーションを実施中。進捗5%くらい。仮説とは違う結果が出ているからその原因を見つけ出したい	問題意識の設定	0字 論文はまだでも先行研究のまとめは始めたい	③	シミュレーションなんて上手くいかないのか。
		子どもの○○の問題	3	2	やりたい	子どもと大人を各々対象にしたアンケートを取りたい			0字	③	テーマが定まってない
		○○における○○の積極性を高めるためには	5	0	やりたい。○○が進んでいる学校へ調査とかしたい	する気がする	文献調査	文献調査 できればアンケートの制作	0字	③	テーマをどこに絞るのかで迷走中。文献がなさ過ぎて困っている